

911.3
バ
秋冬

芭蕉句集
秋冬



芭蕉句解

高中文藝を述

法水より早も睡床や岩の上

けふの初まゝに夕乃夜風をききし 遍昭町
歩み吟より人なりをききしはなり 岩より後
痛きれいもむし者の名に我か多し可 世にむく
昔の夜に思ふか余よりいふより秘心 遍昭又松岡
序よりいふとく 遍昭をむしに 七夕よりいふ
情今ぬ けふ芭蕉句撰よりいふより秘心 遍昭又松岡



合歡乃もし重なりて人の世の如

新後拾遺集 七夕の夜も恨をいふて一夜のうら
しみつくもむ合歡の何れは重なりて人の世の如
あゝわれも恨をいふて一夜のうら
あゝわれも恨をいふて一夜のうら

何れは重なりて人の世の如

世にきく物事の如くもむく世にきく物事の如くも
世にきく物事の如くもむく世にきく物事の如くも

むかひのふりて神記ふりて 人の世の如くも
世にきく物事の如くもむく世にきく物事の如くも
世にきく物事の如くもむく世にきく物事の如くも

二日月や藤の夕はあむし

二日月の如くもむかひのふりて神記ふりて 人の世の如くも
世にきく物事の如くもむく世にきく物事の如くも
世にきく物事の如くもむく世にきく物事の如くも

丹野亭

本邦まろ、毫一、骸骨の
苗鼓、あゝ、能く、あを
画く、深き、の、望、柳、

稲妻や、都の、あゝ、も、は、秋

秋、あゝ、ふく、は、も、も、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、
この、あゝ、も、あゝ、と、

稲つゝ、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、

あゝ、秋、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、
あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、
三十棒の後、あゝ、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、
思、心、念、底、を、あゝ、と、あゝ、と、

河川の、あゝ、と、あゝ、と、

秋、と、あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、

客舎、并州、已、十、霜、帰、心、日、夜、憶、感、陽、無、端、
更、渡、桑、乾、水、部、望、并州、是、故、郷、と、
あゝ、と、あゝ、と、あゝ、と、

望みありくく様ありけりやか帝花

讀古今集 何と云ふのふは是なりと云ふ
あわれと云ふかきき

足波せいの神まなづねい活の秋

足波せいの明石より活の風常ふかふ人
神といふ旧事と云ふいかうむらや足ねいふに
眼希と云ふあふくく白と活花水月のよに
ぬおるくく神と云ふわきと云ふ

紫の月やそのもろく坊

紫の月やけいやくと云ふわきと云ふ世はたのり
そのもろくく西上人 例は山家集の供と云ふ
けいやくの親老あり又云ふ書は曾空也無水之地多
穿井く必耳冷は其常唱弥陀号俗名弥陀
井往く而在焉荒原曠野每逢遺骨据聚
一處念弥陀名く世の人ありて
ふ又市上人といふく白中乃ありて坊
んよりん

圓頭一笑百媚生六宮粉黛無顏色
このんよか多し

義虫巻

今宵誰の月十六里

新古今集と書され候く風よ来はあつて月夜
月と云ふん義虫居祖意の古く伊賀山の中なり
け句の十六里山中より芳野人の初程あり

月よじよ明智、書れ彩せし

け句の何かに伊勢又云、完るるらんゆふき書
男のいふくく物やゆりやうるんえん縁のんをく
あやめぬ月向う書女髪とゆき席とまうちり
知れ今又やまてありきて接折の今より初をを
句云ふちかきり多しゆき袖はるきを記せ

本因亭

浪家や、あや月とに田と反

山居世の上田と反味嘆ハ斗小者なりこれの終新と
一休孫作誦しあり本因、書法大坪のなり

香吟所の門へて菊菫と成る

菊の波大花に外波

不曼花中偏愛菊此花同後更無記
こゝかめりて此の富貴書ひて成る

園女亭

こゝかめりて此の富貴書ひて成る

西上へ出都の富貴書ひて成る
こゝかめりて此の富貴書ひて成る

さうそのに花を標し上回假金成の如く
武江の海にからせし眼科を以て新薬に
又秘才也との書せし一節を以て古蹟に
靈巖寺起佛堂を以て拜せし都の日の乃曜
一室に数人の富貴書ひて成る

本名は花の波大花に外波

この花は花の波大花に外波

この花は花の波大花に外波

この花は花の波大花に外波

二字カハ、晋郭泰入南山、飢甚、拾橡實而食、又杜甫詩、歲收橡實、隨租入、

乃知三年

此部、權、之、皆、之、要

淮南子、說林曰、湯沐具而蟣虱相吊、大廈成而燕雀相賀、

我朝乃心、之、秋、乃、

只、時、有、此、同、海、の、秋、乃、心、之、秋、乃、

歐陽永叔秋聲賦曰、夫秋刑官也、於時為張、又兵家也、於行為金、是謂天地之義氣、常以肅殺為心、

權、

乃、之、日、は、秋、の、心、

新古今集、後人の秋意、を、秋、心、と、

之、心、を、乃、心、と、

凡、言、外、乃、心、と、祖、海、生、涯、二、三、年、乃、

考、也、と、秋、日、記、に、云、

あけくさ

卷之六

三

庭掃く
如く
や
有
り
ち
る

五

花
子

あゝく古代をきく人の夕暮るゝと或記曰東ハ
風乃大カ名居といへ人徳念右大母の伊能まきて
そちと南カ此時更成ふ人をも極ふ杉船の竹
自負紙かき多いもたよ是とむいむい富山鳥帽
うかうと名居あめ肩をつゝははれまゝ

芳時

破くくあゝあせや方書

みく時山の秋を小書えあつてくあうあ
けきと高きうとあめはるまゝあゝ一信

伊能の町防をいへるくくく入るを
あゝと信書紙をむの家の外り横の細う紙
書いてあねの湯に付たり

桂枝と鳥けりる秋の書

けいハ孝吟く世は書を一紙新立の書信の
一書よりまふ集よあゝ寸紙をあゝん
よりあめの肢かきあゝあゝあゝのく
かゝる只く世乃あゝあゝのあねといへ人
間やあゝの秋想もあゝ

夕影中 移る色くの瓢箪

更らるる山をくまきどし移らるるの花も
何れもけしき乃んかゝりや哉の句は受

河内文梁亭

口切し 端乃度いあしき

泉別境より休居士持家の庭地なり句意おま
しうけお地と大書満くしとるなりとて悉く
極かゝしと由ありはふ書なりとをきりし

常侍の書に 由きし屋敷本同か 宗祇

お新清や 仲の屋敷か 西の林

目蓮上人の報書より新麦一斗 筆二本 仲のやうか
はみ 南を州法蓮苑地を回向いしと又新麦を
行六亭より縁藤のけしき破きと書く 新麦は筆ハ
より最句の排合ありとて 書しるに 新麦や
筆より 新麦の房より けしき 行六より けしき
と 晋子 福いふと 乃 福氏ありし けしき
から 新麦より いし みの おおありし

存心月見其妍

水苦く偲羸咽を聞せり

泡蟲うぶむし趙南しやうなんのふとん

山家集

一 雲もくはぬ雲のゆくを

捨中と食成あり人いふあり今とそふ
 あり西上人

イニ多田
木と校規

人よ家と世を繋ぐ

美の人と智もかく徳もなく功もなく名もない

啜菽飲水

長嘯乃塚中石神子文

長嘯子いふに天授と号す金吾中納言秀秋
の舎兄あり清子世をいひて洛東靈山と
からむと初祖を誦す交々の名率くあふ

其海とつちをく 舉白集とす 小塩山乃
林廓と古墳あり

貧山の冬おゝり雪雪

山々、貞享のはり、
 上、有鐘焉、人所不可至、霜既降、則鏗然鳴、蓋
 氣之感也。

高ちや秘蔵の片は

東大寺に呉王の書ありん

附門人傳

乃婦子傷心兮

けいふの撰爲に古抄よりあせり社日記より肺の

東の山々 吳天よ高城なるあり

釋惠崇詩 笠重吳天雪 鞋香楚地花 他
年訪禪室 寧憚路岐賒 飽 乃てよふいりたり
云ふられ二祖 高僧よそひく 磬月とてあまひ
乃んの源切も無へ 乃んといへる けい叟の 福味 けい叟はそ

對門人傳

くわや 世乃 婦子 傳 ぬ 古 金 子

けい 吟 句 撰 爲 小 古 抄 子 と ぬ せ り 神 月 記 小 乃 脚 の

八雲一具雅波に御し重なり此路通法師七事の法
師の法を尋ねて曉りては云ふこと何れなり

をのりありてありき候の言

歌よ 何れにたふ人にあはれぬ身なりやわ
よちきあめり月

月より此所よりいふ路に麻をふ

昨きの月より此所よりいふ路に麻をふ
又此所よりいふ路に麻をふ

附録

山いふ家蜜柑の色は黄よあ

けりあふいふに伊賀国何れより身より才二の
吟なり 大山口授 幾分の都よりあへて後の世にて
祖をたへるものいふ路に風をいふ祖をたへる
風を祖をたへるものいふ路に風をいふ祖をたへる

後人風を移る幾白くあるなり中この集を
おひいたるうらなり先師の神日記をよみて
けふは幸端の松乃と記切字は端ありこも
かしつゝ杉年と月にそりとおとそき他を
得る伯船集くお老井の物語りふはありの
古志の身はたゆかば信ありいんや中か
思をりしとけ一集ありいさ事ふすくお
河しるわき著きくそけやうふせやも又他日
記よいく才といふ才このまうう事を知り
ふり中よりもしぬはやのまかくてふ才

之知りいれしを來時傳ある昭才といふまう

おもきう 秋風さくやうしん

けふ方良ふありにくれわきなりんく

おねの玉もひくもはくのほかに

そのかはき地くくくくおね

お奥ねの境とさうさうななりたれくは
わきなりんくこの句續猿蓑集の公ね
かなりねと古字のほね

とくの名も終一まれ事
けりし頃より孰れと見えん

さうが都津より小唄家の花
根青の百負う素堂老人の句なり

是詩よく傳へんやうなりむ
杜國より人のいふと合ふ

馬あふに夢たむむ佐布小

翁の今より

あゝ如帆を舟凡のそと

一品うりなり

あゝあゝとあれやう雲を
原中やわたりつたむ

仲日記よりむりわやあつた
何よりともなひにわたりむり
常乃粉骨むりなり

おとほいや歯は喰ふ一歯者の所
歯はうらやのおとほいや歯者の所

唐破風の入りやうもふ夕もふと
唐破風や日新けうふ夕もふと
破風はう日新や弱るやうもふと

櫓の夢はとちと腸氷るあや洞
櫓の夢や腸氷るあや洞

み月の六日いなりあふも
又月や六日も常れあふも

萩原や一夜らやとせむの太
根も一夜らやとせむの太

何うの月もあふも
何うの月もあふも

月にはれとるやうに月のは

月見てしものたふもや源氏のそ

右十七章神日記はゆきとく毎集あるを
そと故春の百結はあつてむ

藤乃あけけけけけけ

葵云けけ神日記けけ公標よりと縁を
人を送るけけけけ

楊柳の志のふい月たな結り耶

葵云この句神日記はな山けけけけ

大井川波は葵のけけけけけけけ

清龍乃波は葵のけけけけけけけ

清龍の水汲あつてけけけけけ

清龍や波はちりちりむちり

葵云この句は神龍波乃病麻けけけ

知つて世経園女亭とてあつて目たけ

見たりけけけけけけけけけけけ

知つてありけけけけけけけけけ

吉原集あるけけけけ

家なき

花と名よきしの路や廿日や

イニ花

夢云花乃初中後と大概ニ七廿一日や
しりきり白あふししは字と字の誤り

いさ音のいつとと物に油さく

夢云いさ月の初より終るまで残雪の白さ

時ふりきり花に雪もあふり

夢云世の清き白撰の如く自然に成る

ふはくしきと花に雪もあふり

イニ花

雪のあやうきと花に雪もあふり

夢云この白き乃花に雪もあふり
夢云と云ふ

けりし目よるものいさ

夢云イニの字はしりきりと

葵云世句連卷句撰しけり貞享紀の念一

るほくく 家子後まゐる 枯野ふ

いゝまじふ

冒のあやまひまゐるくつ例

葵云この句冬乃部くわせり集りぬき
集りぬき

けりり目ゝるゐるとのいふ源一

葵云いゝの字がし源と定一

東ノおと宗良ノ難波ハ夕月夜

イニ東の番也

夢云句法影略互顯口授

船ノハハ誰モ知ルハ行方何

イニ船を

夢云け句ハ松島ノ時北リイキ長江ノ名ノ句
か久ハ名所ニ難乃格あり船を句云々

暑目と海ハ入リり客上門

イニ暑目と海

家客ハ四角かハけと客乃日

イニ客

るる新也ノ行船も暑目夜

イニ夜

客ハノ名所ハ客モ知ルハ

イニ客ハノ

訪杜国

れハハ荒ハ江ノ名所ノ

イニ荒ハ江

風鳥奇也

東ノ名所ハ行方ハ客上門

イニ客上門

松葉禁ハノ名所ハ客上門

イニ客上門

藝云田家くわきふゴころふけ事や法書
ごと禁くところの張あり

月代や晴くくさく音の音

一三雲

拂くくさくさうく

十六あもさく文種乃歌うね

一三粒

わつくくさくゆくく拂く夕涼

一三やのまかーて考

この宿い水鶴くあくの廊く

はくくさくも大竹原を浅月水

一三粒

麦乃月傳ゆくくさく赤坂や

一三

か油くくさくさくありむ細相見

一三と

田家

麦飯くやけくさくぬく猫の書

一三里の猫

名月くくさくさくく水田の楊

一三水田の月

一尾根くさくさくさくさくの書

一三

そ川秋や青ふなりけり此の秋も
七夕や秋もさうむふ秋なりけり

あきとふりもさう秋なりけり

あきとふりもさう秋なりけり

二見の浦と

あきとふりもさう秋なりけり

あきとふりもさう秋なりけり

あきとふりもさう秋なりけり

和角蓼螢句

あきとふりもさう秋なりけり

あきとふりもさう秋なりけり

あきとふりもさう秋なりけり

あきとふりもさう秋なりけり

あきとふりもさう秋なりけり

飲水華年中能會

如我く人にもたうやる能哉

畫襪

白襪もあはさぬ哉乃う好うを

河川店

せせ紙幣かして鹽ふる紙さく紙

眼前

道の乃木槿ハ馬車、喰進む利

月さやー木を床に面紙持さる

河川の未だ松といふ所松さうで

川上とこれ川下や月乃とも

やれく紙体ひふ月乃とも

名月此夜と見えし海を
之井と此門と見えしや
米とて友とて見えし乃
やとてと見えしと月乃と

閑人庖牧亭とていへ

芳林と井田と年のある
秋海棠西瓜乃いろと

小枝と遠く来る別とて

相のあり 新啼 なる堀の内
望田とて

病屋の抱きとて旅夜とて
ひと啼とてとて秋乃麻
横やとてとてとてとて

秋のや藤ももつげもふ枝の葉
身うみく大根うしし穠乃何

那谷のハ奇石さかく上松

極ましく穠乃の土壌より

石乃乃るるをふーおれのと葉

座存の銘

人乃短といふなり此
こゝ長を流半ありき

そのこを唐室ー秋乃う芳

山中温泉

山中温泉のふりーお湯の匂い

あぐれあやあぐれーあぐれ佛てら

菊乃香やあぐれハ幾代乃男ふり

後醍醐帝ハ清陵とおむ

清陵のこをけくあのか行紙書き

和草やーあふあふ草乃ーあふり

伊勢の斗從ふ山家とてまき

夢麦の海に記てまき山家とて

武藏野とて山家とて

山家とて山家とて

死もせぬ病のまき山家とて

清のちれ山家とて

松風乃朝とて山家とて

和のちれ山家とて

重屏乃春とて山家とて

贈酒堂湖水の磯とて山家とて

芦岡の蟹とて山家とて

も馬の春とて山家とて

難波津や田舎乃とて山家とて

志げのちれ山家とて

先程の春とて山家とて

極子清醪常一樽をせさる

之秋を強く酒を居る飯をいふ

門人つふまうていふと因はる

作

やもかきしやうや雪の枯尾記

熱田梅人亭落葉乃閑とおひ

よめ

水仙やらう清きれやもうけ

旅人をとる

馬代さしゆふ雪はあし

對友人曾良

君火さけしにゆえん雪丸を

閑居の歳 前書有

海のやもいふゆきお新け雪

いふゆきは雪をいふゆき

はひふくむ鳥を宮の御へけ

自画自讃

いふなりき言や雲乃 樹うと

かづもき也能疲もきの中

越人と言田乃詠うそ

きもれと二人様寂ききなりた

うけけもふたのうきさてゆけ

うけや銅もきなりき分

銅豆きふ言えけきき

煤掃やききけき乃煤き

乙女新ききききき

人ききききききき

わききききききき

かききききききき

旅宿のこゝろのさびしき

しるしのせきをききてこゝろを死うつつ

うつつききしるしのせきをききてこゝろを死

稽引ハ稽乃小袖とさめさめ

うつつしるし我も世を秋のそよ

老乃名れききとさめし四十在

明月のせきやふ十三箇 桑

稽乃かたかなうつつや楠のそよ

吾もそのや古物屋のせき戸 紅葉

しるしやふ甲れ中乃さうしん

るし海やせき後うつつよその川

稽妻や稽乃方けりせきをき

うつつしるし海老老る稽乃雪の曙

塚もうつつけりせきをきき秋れ

付や快ひさうさ月形も
乃云起るも月乃七川之れ
昔乃其の表にせうと云形を

江戸書林

前川六左衛門

大坂書林

塩屋忠兵衛

皇都書林

野田 治兵衛

跋

翁之遺藻流世也久矣乃
漆指好士莫不珍之軍手
有遺味則俾人一唱之歎
唯膚淺之徒以為是雖玄
酒大羹也古拙無味蓋知
其真者鮮矣雪中菴主嗜
之入佳境有年于此業已

識勞薪所炊之能辨留瀝
 意其多年之所味提以注
 彼冀令他屬厭而已耳所
 謂叨鳴鹿取其態倒其
 心在斯乎其亦在斯乎
 文人東志書于道途園



大坂書林廣寫猷可堂藏版目錄

此屋忠志清

七支子詩集

小本

一冊

發蒙書東式

三冊

同掌故

三冊

下段ニテ詩ノ本支ヲ記シ上堅致事ヲ
 詩ヲ出シ出處之ヲ註解ヲ取請作便ス

傷寒五法

五冊

同註解

二冊

茶道七事式

二冊

同國字解

二冊

同七律解

二冊

町見辨疑

西川氏

五冊

詩法授幼抄

小本

一冊

斧介集

辭聯ノ書

全

詩對類語

同

全

詩家法語

辭聯ノ書

全

勝地百益

小本

二冊

三界一心記

公學

一冊

將基指掌抄

小本

二冊

狂歌芳名船

小本

一冊

農家心得草

小本

一冊

同六窓抄

小本

一冊

同金石圖式

小本

一冊

新秋桐火桶 二冊

新元はみ 一冊

名氏新義句解 二冊

同拾巻と 二冊

其角新義 二冊

同元巻 二冊

貞徳新抄 二冊

同元巻 二冊

同元巻 二冊

同元巻 二冊

同元巻 二冊

同元巻 二冊

俳諧小づち 一冊

同まが 一冊

同四季歌 二冊

芭蕉袖筆 二冊

同小外 二冊

同初紀 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

新水奈句集 二冊

二柳春句集 二冊

西賢集 二冊

俳諧分 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

同二巻 二冊

御清八重垣 一冊

御應永永一 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

御清八重垣 一冊

御應永永一 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

御清八重垣 一冊

御應永永一 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊

三才圖會 一冊



